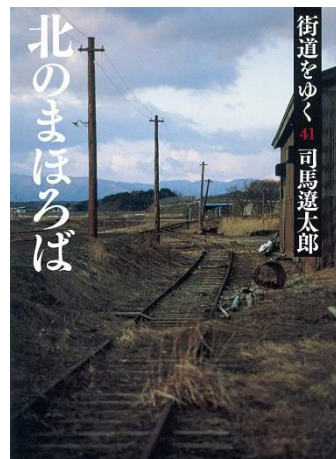


## 北のまほろば・アジアのアルカディア

先日、(NHK) 新『街道をゆく―北のまほろば』を鑑賞しました。

同番組は、作家司馬遼太郎(しばりょうたろう)が終生深い思い入れを抱き、亡くなる2年前の1994年に旅して記した、(青森の)「北のまほろば」を取り上げたもの。縄文の巨大遺跡(三内丸山)、津軽が生んだ文化人や芸術家(太宰治や棟方志功など)にもスポットを当てながら、厳冬の津軽半島を舞台に、司馬の足跡をたどります。(かつて作家・太宰治は故郷の津軽を「本州の袋小路」と形容して貧しさを嘆きましたが、)『街道をゆく―北のまほろば』では、古代におけるこの地方の豊かさを「まほ(真秀)ろ場」という最上級の場所を意味する古語を使って表現しているのです。…しかし、状況は時代とともに一転…、“歴史において何時からか津軽は寡黙になる”。そこには、近世以降の津軽藩のコメ一辺倒政策の悲劇(失敗)が原因していると分析します。…かつての「北のまほろば」は、その後、文字どおり辺境の地としての歴史を刻んできてしまった。…「コメに偏執し、相次ぐ無理な新田の開墾によって江戸中期には実高30万石をあげ得たが、(藩勢の格付けを高めたかったのか)無理に無理を重ねた」と指摘します。…農業に加えてこの地に合った林業や漁業、狩猟、牧畜、交易を盛んにしていれば、「古代以来の豊かな自然を享受する暮らし」が続いていたに違いない!と惜しんでいるのです。…番組の中でも紹介されていた民謡「十三(とき)の砂山」も、かつて繁栄した湊町・十三も大津波や洪水などによって、「砂山」が残るだけになってしまった…と、津軽民謡の代表曲は、美しくも、哀愁に満ちたメロディで歌われてきました。…その後、何万人という餓死者を出してきた飢饉(ききん)の国は、苦節2000年、(農業技術の進歩の恩恵を受け)米の生産高(反当り)で、遂に全国第1位の座を獲得するほどになった年もあり、リンゴ、長いも、にんにくは今では全国一位。津軽平野は、縄文に続く弥生的世界においても、再び「北のまほろば」となったと、司馬は慶んでいるのではないのでしょうか…。



ところで、わが山形も、「アジアのアルカディア(東洋の桃源郷)」と美称されることがあります。出处はイギリスの女流探検家イザベラ・バードの紀行文によります。1878年(明治11年)5月から12月にかけて日本を旅した彼女が、日本での旅の記録を残した『日本奥地紀行』(当時の欧米でベストセラー)は、近世以前の日本の暮らしやアイヌに関する記述も豊富な大切な資料として今に残ります。その中に出てくる「アジアのアルカディア」という記述。それは山形を旅したバードが置賜盆地(米沢平野)を評した言葉で、山形県内に入ってから豊かな自然や田園の風景を称賛する記述が一気に増えたといわれます。(…もしここが外国人の容易に来られる場所であったら、美しい景色を味わえる健康的な保養地となるであろう…と。)

私たちも、彼女の感動ぶりを素直に受け入れて、郷土に一層の誇りを持ちたいものです。

